23-04_62-発想安西3P.qxd 23.2.24 7:29 ページ 62

Lesson 203　発想する！授業

生涯にわたって
社会のいたるところで学ぶための方法序説

学習支援者としての「気づき」を「学び」へ

安西 春樹

提案：さまざまな「ひと」の価値観から気づきを得、主体的な「学び」を考えませんか

先日、「傾聴」をテーマとした学習講座で、次のような出来事がありました。

講座初回に受講生へ向けて、「ボランティアと聞いて、どのようなイメージを持ちますか？」という講師の投げかけに、「ボランティアと聞いて、強制的と浮かびました。自分にとって一番縁遠い世界だと思っている」と答えた方がいらっしゃいました。

区民カレッジ「ボランティアのための傾聴講座」

この学習講座は、区の主催する中央区民カレッジ（以下区民カレッジ）の講座のひとつ、「ボランティアのための傾聴講座」という名称で生涯学習のきっけづくりとして実施しています。2014年度（平成26年度）より中央区社会福祉協議会と合同で毎年講座運営を行っています。

区民カレッジでは、区民の生涯学習の目標のひとつとして「学んだことを地域に生かす」を掲げています。区民カレッジの中では、その目標を実践するための生涯学習サポーター養成コースを設けており、どのようなボランティア活動、地域活動においても「傾聴」の心構えはきっと活動の糧となり、円滑な実践に結び付くという思いでこの学習プログラムを組み立ててきました。

講座の内容は、実践的なグループワークやロールプレイを通して「傾聴」についての理解を深めるとともに、ボランティア活動、地域活動はもちろん、実生活の中での言葉を介した人との関わり方のヒントを学ぶ講座として進めています。また、実施年度によっては、実際に区内でボランティア活動をされている方の体験談を取り入れる回も設けてきました。

受講生には、現在関わっているボランティア活動・地域活動に役立てたいという思いで受講される方、これから地域で活動をしてみたいという方、家庭や職場での人間関係を円滑にしたいという目的の方、参加動機はさまざまですが、講座をきっかけに、区内の「傾聴ボランティア」の活動を始める方や、続けて「傾聴」の研修会を希望する方などが毎回いらっしゃいます。

違和感・疑問から気づきを得る自身の先入観に気づく

さて、冒頭の講座初回での出来事に戻ります。

私は、その方の「強制的」という言葉を聞き、すぐに違和感を覚えました。良い悪いではなく、正しい・間違っているでも

なく、自分の思う（思い込んでいる）ボランティア観と真逆だと感じました。後ほど共に講座運営を行っている社会福祉協議会のスタッフとも、やはりお互い違和感を覚えたと話しました。

同時に、もしかしたらボランティア＝強制的とイメージされる方も少なくないのではとも考え、その理由として、ボランティアの現場ではそのように見える部分や、実質として低コストの労働力としての扱いであったり、下請け作業的な働きになることに心当たりがあることに気づいたのも確かです。

皆さんはボランティアと聞いてどのようなイメージを持ちますか？また、ご自身の周りの活動が実質として「ボランティア」の定義や理念に合致していると感じますか？

学習活動とボランティア活動の現場では

社会教育の現場を職場としている私たちは、「学習」＝「主体的な活動」を疑いなく当然のことと考えています。しかし、現実はどうでしょうか。ひと昔前の学校教育のシステムに慣れてしまっていた世代にとっては、「学習」は、教室の中で先生が多数の生徒に向かって一方向に話をする、知識を伝えるイメージのみの方も多いのではと感じることがあります。

社会教育の「学び」では、それは方法の一つとして考え、他にも相互の学び合いがあることを実践の中で気づいてもらうことが主体的な学びの第一歩となることも多く、学びの場をつくる職員の方は、どのようにその環境をつくるか頭を悩ますところだと思います。

同じようにボランティア活動の場でも、「指示してほしい」「指示してくれないと何をやってよいかわからない」という場面が多々あります。なるほど、すべてが主体性に任せることが正解とも限りません。その場のルール、方向性を共有し、納得した上でボランティアとして関わる当人の力を発揮できる環境が求められるのかと思います。

ボランティア活動を行うこと、向かうことは自主的・主体的な参加。ただし、活動内容に責任を持つことや、活動の現場で他者と共通理解を持つことが前提になるのかと思います。

何でもかんでも自分の思い通りにすること＝主体性とも言えません。必要なのは、周囲との協和を前提に自発的・自主的・主体的な活動を行えることだと思います。

違いに気づき、「学び」へ

当然のことと思いがちなものについて、誰かの疑問や投げかけは「気づき」のきっかけとなります。今回の出来事をきっかけに、私も気づきを得、あらためて考える機会をいただきました。

冒頭の彼と同じように「ボランティア」＝「主体的な活動」がしっくりと結びつかない方もきっと多数いらっしゃるのだと思います。当然と思っている事柄についても、常に違った考えを持つ方がいることを念頭に置くことが相手を知る一歩であり、人との向き合いの前提であると思います。　常に自分の持っているアンコンシャスバイアスを自覚したいものです。

「ボランティアは良いことだ」「社会教育活動は良いことだ」というバイアスに捉われている私も、他者との関わりをきっかけに見つめ直しと本来の意味や必要性をあらためて考えることが大切だと気付かせてもらいました。その確認の意味で既成概念や思い込みに疑問を持つことも時には必要ではないでしょうか。

23-04_62- 発想安西3P.qxd 23.2.24 7:29 ページ 64

傾聴講座の中で、講師がこのような話もされました。

「私たちは先入観を持っています。先入観を捨てるのではなく、捨てることはできません、自分が持っていることを自覚すること。その上で他者が別の価値観を持っていることを知ることが大切です。」

先述のボランティアのイメージ＝強制的と話された方は、初回講座の終わりの感想で、「この中で一番人の話を聴かない自分にとって、傾聴の考えは必要なものかもしれない。残り4回の講義に出ることをがんばります。」と話されました。

本人は、事情があったのか、お気持ちが変わったのか、残念ながら初回のみの参加で辞退することになりました。1回のみの対話の機会でしたが、彼にとっても何かしらの学びのきっかけとなったことを期待したいと思います。

学習支援者としての「学び」

図らずも、今回の学習講座のテーマは「傾聴」です。傾聴は、まず相手の気持ちを汲み取り、受け容れる所から始まります。相互に「聴く」ことができ、相手を理解することから対話による学び合いも深度を増すのだと思います。その上で本連載で松田先生が提案する「等話」のルールで対話ができると、より効果的な「学び」の場になることでしょう。

学習支援者としては、学習者の気持ちを受け容れ、学習者の気持ちや意欲、方向性を整理する手助けをし、さらに学習の助言、提案を行うことが求められます。

そのためにも、多種多様な人を見る気持ちや考えに触れ、先入観なしに相手を理解する能力を鍛えないといけないと感じました。社会教育の環境醸成は、この一つ一つのやり取りを丁寧に行うことで実現されるのではないでしょうか。

また「主体性」は、何より本人が意識を持つことが大切です。「学習」についても「ボランティア」についても当事者が気づき、意識を持つような環境をつくることが私たち職員には求められているのではないでしょうか。

4月、新たに社会教育の仕事や活動に就いた方も多いことでしょう。また、ベテランの方もはじめての試みは常にあるものです。学習支援者も学習を実践する只中の一人として、一つの事例、一つの出来事から得る気付き、支援者としての学びをさらに積み重ねていきませんか。

安西春樹
（あんざい・はるき）
中央区区民部文化・生涯学習課
総括生涯学習指導員

豊かな体験が青少年を育てる
―学校・地域・家庭が連携・協力―

編／伊藤俊夫　ISBN4-7937-0128-0　2003年9月25日発行　A5判 144頁 価格1650円（本体1500円+税）送料310円

【主な内容】Ⅰ　豊かな体験が人間をつくる／Ⅱ　体験活動を推進する（スポーツ　文化・芸術　家庭教育等）／Ⅲ　もう一つの公共サービス（ＰＴＡ　公民館　青少年教育施設　図書館　博物館　ＮＰＯ　学校支援ボランティア　等）／Ⅳ　知恵と意欲の結晶（総合的な学習の時間　自然体験活動　ボランティア活動の教育力　唱歌と童謡　就労体験　モノづくり　農業体験等）

書店にお申し込みまたは直接日本青年館　TEL 03-6452-9021 FAX 03-6452-9026　までご注文下さい。